

伏見先生とのこと

柳瀬睦男

このたび、伏見康治先生の著作集が刊行されるといふことを伺い、喜寿を迎えられる先生の幅広い、そして奥深い業績の一部が多くの人々に紹介されることになったのを、心から喜んでおります。伏見先生について何かお話をすると、余りに沢山のことが浮んできて、收拾のつかなくなる恐れがありますので、ここでは先生と私のごく個人的な関りを述べさせていただきますにしました。

伏見先生のお名前を伺ったのは、同じ高等学校（東京高等学校）の後輩として、先生に物理を教えられた大島久次

の伝播に関する短い論文を書いたのが、私の生涯での最初の論文となりました。また、戦争直前に執筆され、御自身で挿絵や装幀も手がけられた『驢馬電子』は、理論物理学に対する全く違った立場からの鋭い、かつ啓蒙的な書物として記憶に残りました。

私の学生時代を通して、伏見先生についてもう一つ忘れられないことは、量子論理に関する先駆的なお仕事でした。バークフ、フォン・ノイマンの有名な論文（一九三六年）が出たのと殆ど同時に、先生の量子論理に関する論文が数物学会の英文誌（一九三七年）に載せられました。それには「I」という番号がつけられており、恐らく先生はその続編を書くことを考えておられたのだらうと思います。しかし残念ながらそれ以来今日に到るまで、ついに先生の量子論理に関する論文の続編は出版されませんでした。私はたびたび先生に「どうかこの続きを書いて下さい」とお願いしたのですが、例の意味深長な笑い声で私の願いをとうとう聴いては下さりませんでした。しかし私は今でもこのお願いを諦めてはおりません。先生が信念をもって政治の世界に出ていかれたのを惜しみながら、いつの日か、この量子論理のみでなく、更に優れたお仕事を発展させて下さることを念じております。

さて、私は一時、物理学から遠ざかっていた時期がありましたので、その間、先生に対して御無沙汰を申し上げる

郎先生が「渡辺（慧）君と伏見君はよく出来た。特に伏見君は群を抜いておった」と私たちに語られた時が、初めてであったと思います。そして高校時代、生意気にも、その当時盛んであった理研の研究発表会に出席し、そこで渡辺先生と伏見先生が、確かクラインが始めた五次元の量子力学のフォーマリズムについて講演されたのを拝聴する機会を得ました。当時、菊池先生を筆頭に、多くの俊秀のおられた大阪大学の物理学科は定評があり、東大よりも阪大に行ってはどうかという渡辺先生のお勧めを受けていたこともあって、その講演の後、渡辺先生の御紹介で、私は初めて伏見先生にお目にかかることができました。その時、伏見先生が私にどのような注告を下されたのか、今日はいきり覚えておりませんが、結局阪大に行く機会を失し、伏見先生から直接に講義を受け、指導をしていただくことができなかったのは、今考えると残念な気がしてなりません。当時の伏見先生は理論物理学のみでなく、菊池研究室で実験も進められていたことを、阪大を見学に行った折に伺いました。私が大学に入って二年目の頃、伏見先生の有名な『確率論及統計論』（河出書房、応用数学講座）という分厚い著作が出版され、私たちはそれを食べるように読み、その程度の高い内容に驚嘆すると同時に、多くの刺激を受けました。そこに書かれていた「誤差論」、特に四捨五入の誤差についての短い一節にヒントを得て、四捨五入の誤差

ことになったのですが、再びお目に掛る機会を得始めたのは、先生が阪大から名古屋のプラズマ研究所所長としてお移りになってからのことだと思えます。研究所をお訪ねして見学させていただきましたが、それを機会に時折お話を伺うことになり、更に一九七三年（昭和四十八年）に国際時間学会を日本で開催するにあたって、その準備を始めた時、準備委員として殆ど一年以上にわたり、頻繁にお目に掛り、指導とお助けをいただいたことは、私にとっての楽しい日々となりました。事務的な事柄についての御指導を仰ぐよりも、むしろ学問的なお話を伺うのが楽しみで、この国際学会の準備のためにいろいろな方に執筆をお願いし、最後に座談会で締めくくって、それを中央公論社から『時間とは何か』という書名で、先生との共編という形でまとめさせていただいた仕事は、その時のことを思い起こすようになります。その後もたびたびいろいろな問題で先生の御意見を傾聴し、時には渡辺慧先生と御一緒に会食をしながらお話を伺ったことも、忘れ難い思い出となっています。

伏見先生と渡辺先生は、東京高等学校の尋常科から大学を卒業するまで同級生であり、その後も今日に到るまで学問の上ばかりでなく、多くの面で互いに啓発し合っておられる御様子を側で拝見するのは、心温まる、また嬉しい、まことに羨ましい間柄と申せましょう。渡辺先生が伏見先



前列左より山口太三郎、菊池正士、岡小天、後列左より湯川秀樹、渡瀬謙、青木（熊谷）寛夫、伏見、坂田昌一の各氏（阪大理学部屋上にて、1934年）

生を非常に尊敬しておられること、またお二人揃って喜寿を迎えられるようになって、その知的な活動力がいささかも衰えておられないことは、我々後輩にとっては大きな教訓となります。二年前、私がたまたまローマに滞在しておりました時、伏見先生御夫妻は、会議の帰途、ローマに立ち寄られました。パチカン内部、特に科学学士院を御案内したり、郊外のカステルガンドルフにある法皇離宮のパチカン天文台をお見せすることができたのは、私にとって大きな喜びとなりました。

今後、伏見先生が、学術会議で果たされた大きな役割を、政治の面で更に効果のあるかたちで、日本の将来のため、また世界の学問の進展、特に学問の平和的な応用に関して、指導力を発揮していただきたいと願わずにはいられません。

（上智大学理工学部教授、前同大学学長）

